



新諸國物語

笛吹童子下

北村壽夫著

日 音 版

昭和四十八年一月二五月初版発行

〈著者〉 北 村 壽 夫

〈発行者〉 日 本 音 楽 出版 会

代表者 秋 本 茂

〈編集者〉 日本アート・センター

東京都千代田区神田神保町一―三五  
電話〇三―二九四―三八九一(代表)

〈印刷者〉 特 進 印 刷 所

東京都千代田区西神田二―七―三

Ⅲ 新諸國物語  
下 笛吹童子

〈出版営業部〉

東京都新宿区戸山町四三(日本駐車ビル)  
電話〇三―二〇二―〇三〇一(代表)

〈本社〉

東京都港区赤坂五―三一五〇(TBS別館)  
電話〇三―五八四―四七一(代表)

落丁乱丁本はお取替えします

〈発行所〉

株式  
会社

日 音

## 目次

|                  |                  |                 |                 |                 |                  |                  |                  |    |                 |                 |                  |
|------------------|------------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------------|------------------|------------------|----|-----------------|-----------------|------------------|
| 都 <sup>みやこ</sup> | 哀 <sup>あはれ</sup> | 旅 <sup>たび</sup> | 笛 <sup>ふえ</sup> | 玄 <sup>げん</sup> | 尼 <sup>あま</sup>  | 白 <sup>びやく</sup> | 胡 <sup>こ</sup>   | め  | か               | 白 <sup>しろ</sup> | 猿 <sup>ましら</sup> |
| の                | れ！               | の               | の               | 蕃 <sup>ばん</sup> | の                | 蓮 <sup>れん</sup>  | 蝶 <sup>ちよう</sup> | ぐり | り               | い               |                  |
| 使 <sup>し</sup>   | 右 <sup>みぎ</sup>  | 老 <sup>ろう</sup> |                 | 萩 <sup>はぎ</sup> | 素 <sup>す</sup>   |                  |                  | あ  | 奎 <sup>くゐ</sup> |                 |                  |
| 者 <sup>しや</sup>  | 門 <sup>もん</sup>  | 人 <sup>じん</sup> | 音 <sup>おと</sup> | 丸 <sup>まる</sup> | 性 <sup>じよう</sup> | 尼 <sup>に</sup>   | 劍 <sup>けん</sup>  | い  | 介 <sup>すけ</sup> | 靄 <sup>もや</sup> | 酒 <sup>さけ</sup>  |
| 102              | 88               | 77              | 64              | 54              | 48               | 43               | 37               | 29 | 24              | 14              | 7                |

|                  |                 |                 |                 |                 |                 |                 |                 |                  |                  |                  |                 |
|------------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|------------------|------------------|------------------|-----------------|
| 琴 <sup>こと</sup>  | 伊 <sup>い</sup>  | 怪 <sup>あや</sup> | 水 <sup>みづ</sup> | 渡 <sup>わた</sup> | 合 <sup>あい</sup> | 珠 <sup>たま</sup> | 忍 <sup>しの</sup> | 襲 <sup>しゅう</sup> | 白 <sup>はく</sup>  | 執 <sup>しつ</sup>  | 一 <sup>いち</sup> |
| ひ                | 勢 <sup>せ</sup>  | し               | 番 <sup>ばん</sup> |                 |                 |                 | ぶ               |                  | 鳥 <sup>ちゅう</sup> | 事 <sup>じ</sup>   |                 |
| く                | と               | い               | 小 <sup>こ</sup>  | し               | 言 <sup>こと</sup> | 作 <sup>つく</sup> | が               |                  | の                | 職 <sup>しよく</sup> | 番 <sup>ばん</sup> |
|                  | い               |                 |                 |                 |                 |                 |                 |                  | 春 <sup>はる</sup>  |                  |                 |
| 娘 <sup>むすめ</sup> | 尼 <sup>あま</sup> | 僧 <sup>そう</sup> | 屋 <sup>や</sup>  | 舟 <sup>ふね</sup> | 葉 <sup>は</sup>  | り               | 嶽 <sup>たけ</sup> | 撃 <sup>げき</sup>  | 森 <sup>もり</sup>  | 貞 <sup>さだ</sup>  | 星 <sup>ぼし</sup> |

192 187 181 172 167 161 151 140 134 123 118 114

大<sup>だい</sup> 面<sup>めん</sup> 二<sup>ふた</sup> 新<sup>しん</sup> 影<sup>かげ</sup>  
人<sup>り</sup>

団<sup>だん</sup> と の 二<sup>ふた</sup>  
乞<sup>こ</sup>

円<sup>えん</sup> 面<sup>めん</sup> 食<sup>じき</sup> 月<sup>げつ</sup> つ

221 213 209 204 198







猿ましら

酒ざけ

疲れ切った足を引きずって、胡蝶尼こちょうには谷のがけを登り、谷の上に出た。

このがけも高くけわしい。が、小さい時、黒髪山くろかみやまに育ったので、胡蝶尼は谷や山を歩くのはなれている。あたりまえの人ではどうてもい歩けないところでも、登れないがけでも、歩いたり登ったりすることができるのだ。

夕べ近く、山の木こたちはほの白い靄もやの中にけむっている。

胡蝶尼は、谷の底に待っている萩丸のことを思うと、いつときも早く、元氣の出る猿酒ましらざけを探したいと思う。が、どこにあるのだろう。まだ、そんな酒は見たこともないし、味わったこともない。ただ、誰かに聞いたこと、古い木の洞うらにかくしてあるということを探り探すだけだ。

胡蝶尼の心は急ぐ。

と、ふしき、谷の上に出て、しばらく歩いてゆくと、吹いてくるそよ風にまじって、かすかに匂ってくる酒の匂い……

「おお、酒の匂いがする……」

胡蝶尼は夢かと疑った。

いや、夢ではない。たしかに、匂ってくるのは、もの甘い酒のかおりだ。きっと、近くにましちざけ狼酒がある。

胡蝶尼は胸とどろかせた。

「や！」

とある林の中から、とつぜんに誰かが叫んだ。ふとい、にこった男の声だ。

びっくりして、その方を見ると、ひげむじやのさむらいと、もう一人の若いさむらいが、草原に腰をおろしてさかすき盃をあげていた。酒のかおりはそこからだだよってくるのである。

武士たちは立ち上がっていた。ひげむじやの男は刀の柄つかに手をかけていた。

胡蝶尼は、こわいとも思わない。いや、男たちの顔をよく見るひまもなかった。

酒がある……ただ、心をうったのはこのことだ。

胡蝶尼は、林の中に入ってきた。

「誰だ。そちは？」

ひげむじやが眼をむいた。

「私は胡蝶尼……」

「ほほう。名があるのか」

と、若い方がつぶやいた。

「……そちは、人間ではなからう。山の姫か」

「いいえ。人間……。お願いが 있습니다」

「何だ」

「……そのお酒、少しいただけさせてくださいませ」

「え。酒、酒がほしいのか？」

と、ひげむじや。

「……人助けで ございます。氣を失っている お方が ございます」

「なるほど、それで 氣つけに 酒を ほしいと 言うのか」

と、若い方。

「……はい。方々を猿酒ましらざけを求めて 歩きましたが、どこにも ございません。お願い いたします。

ほんの 少うし……」

若い方の男は、酒の 入れてある ふうべを 手に 取った。

「いや。待て！ 黒彦！」

ひげむじやはとめた。

「……山の中でめったに酒は求められまいぞ。よくよく、聞きただした上で、やるものならやるがよい。これ！ 女！ その氣を失っている者はどこにいる？」

「あの谷の底に……」

「……男か。女か」

「男の方」

「そちのつれか」

「……私が、谷の中に流れついた時に、そのお方も、流れついていたのでございます。私はこのあたりの者ではありませんぬ。ふとして谷に落ち、ここまで流されてきた者でございます」

「……ほう。して、その氣を失っている男の名を聞いたか」

「はい」

「何と言う男だ？」

「……丹羽の萩丸とおっしゃいました」

「ええっ」

これを聞くとひげむじやの顔の色が変わった。

「……たしかに、丹羽の萩丸と言うのだな」

「はい」

「よし。酒はおれが持つていつてやる。案内しろ、黒彦！ 急げ」

若い男は、盃をしまい、ふくべの紐を肩からかけた。

が、今度は胡蝶尼の方が怪しんだ。その驚きようと、あまりに行つてやると言つた態度に何かおかしなものを感じた。

「これ。案内しろ」

「……あなたさまは？」

「……おれは赤柿玄蕃だ。萩丸どのはえにしのある者。急げ」

えにしのある……といえば、驚くのもあたりまえ。

「それはそれは……どうぞ」

胡蝶尼は、安心して、いそいそと林を出る。萩丸を助けるにも、この人たちが行つてくれれば心づよい。

谷におりるところに來た。

「この下でございます」

玄蕃という男は、困ったように、

「このがけをどうしておりるのだ」

切り立ったような高いがけを見おろした。明らかにがけをおりることがむずかしいと思ったようだ。

「……娘！ そなたはここから上がってきたのか」

「そうです」

「ほほう」

すると、若い男が持っていた投げ縄を出して立ち木にむすびつけた。

「さあ、この縄をつたわっておりましょうぞ」

若い男は、縄を谷の中におろした。

「よし。これならよい。娘！ そち、先におりろ。案内頼む」

「かしこまりました」

胡蝶尼がまっ先に縄につたわっておりた。その次に玄蕃が、それから黒彦が……ようやく谷におりた。

「あっちでございます」

胡蝶尼は、ゴロゴロしている石から石を飛び越えて走ってゆく。玄蕃も黒彦もあとにつづく。大きな岩にかこまれたよどみの場所に来ると、胡蝶尼は、びっくりしてしまった。そこに待っているはずの萩丸の姿が見えないのだ。

「あつ。いない……萩丸さまがいない……」

「なに？ 萩丸がいない……？」

玄蕃も息せき切って追いついてきた。

「はい。この岩の上にいたのです」

「……………」

三人とも、だまって平たい岩を見た。

どこにも萩丸はいなかった。水が音をたてて無心に流れている。向うの石の上に、人の恐ろしさを知らないせきれいが、ピョンピョンと飛びちがって遊んでいるだけ。

「……たしかにここに横になっていたのです。たしかに……」



白しろ  
い  
靄もや

胡蝶尼は、夢を見ているように、ぼんやりしながら大きな岩を指さした。

「こりゃ、お前はおれをだましたな」

玄蕃が眼をいからせた。

「ううむ。さては、汝なんじは人間ではなく妖怪ようかいの仲間と言われる山姫だろう。われわれをかける口実こうじつをもってここまでおびき寄せたのだな」

「いいえ。うそは申しません。ここで氣を失っていられたので、お酒を探しに出かけたのです」

「ばか！ 氣を失っている者が、のこのこ歩けるか。それほどの萩丸がどこかへ行く道理がない」

「……………」

そのとおりである。だから胡蝶尼はぼうぜんとしてしまったのだ。

若い黒彦という男は、そのへんを探しまわっていた。